

灰だらけ姫

またの名「ガラスの上ぐつ」

ペロー Perrault

青空文庫

むかしむかし、あるところに、なに不自由なく、くらしている紳士しんしがありました。ところが、その二どめにもらったおくさんというのは、それはそれは、ふたりとない、こうまんでわがままな、いばりやでした。まえのご主人とのなかに、ふたりもこどもがあつて、つれ子をしておよめに來たのですが、そのむすめたちというのが、やはり、なにから、なにまでおかあさんにそっくりな、いけないわがままむすめでした。

さて、この紳士しんしには、まえのおくさんから生まれた、もうひとりの若いむすめがありました。それが、それは氣だてなら、心がけなら、とてもいいひとだった亡なくなった母親そっくりで、このうえないすなおな、やさしい子でした。

結婚けっこんの儀式ぎしきがすむとまもなく、こんどのおかあさんは、さつそくいじわるの本ほん性しょうをさらけ出しました。このおかあさんにとっては、腹ちがいのむすめが、心がけがよくて、そのため、よけいじぶんの生んだこどもたちのあらが見えるのが、なによりもがまんできないことでした。そこで、ままむすめを台だいどころ所にさげて、女中のするしごとに追いつか

いました。お皿を洗ったり、おぜんごしらえをしたり、おくさまのおへやのそうじから、おじようさまたちのお居間のそうじまで、させられました。そうして、じぶんは、うちのつぺんの、屋根うらの、くもの巣だらけなすみで、わらのねどこに、犬のようにまるくなつて眠らなければなりませんでした。そのくせ、ふたりのきょうだいたちは、うつくしいモザイクでゆかをしきつめた、あたたかい、きれいなおへやの中で、りっぱなかざりのついたねだいに眠つて、そこには、頭から足のつまさきまでうつる、大きなすがたみもありました。

かわいそうなむすめは、なにかもじつとこらえていました。父親は、すっかり母親にまるめられていて、いっしょになつて、ごごとをいうばかりでしたから、むすめはなにも話しませんでした。それで、いつかつたしごとをすませると、いつも、かまどの前にかがんで、消炭^{けしずみ}や灰の中にうずくまっていたから、ままむすめの姉と妹は、からかい半分、サンドリヨン（シンデレラ）というあだ名をつけました。これは灰のかたまりとか、消炭とかいうことで、つまり、それは、「灰だらけ娘」とでもいうことになりました。

それにしても、サンドリヨンは、どんなに、きたない身なりはしていても、美しく着かざったふたりのきょうだいたちにくらべては、百そうばいもきれいでしたし、まして心の

うつくしきは、くらべものになりませんでした。

二

さてあるとき、その国の王様の王子が、さかななぶとう会をもよおして、おおぜい身分のいい人たちを、ダンスにおまねきになったことがありました。サンドリヨンのふたりのきょうだいも、はばのきくおとうさんのむすめたちでしたから、やはり、ぶとう会におまねきをうけていました。

ふたりは、おまねきをうけてから、それはおかしいように、のぼせあがって、うわぎ上着よ、がいとうよ、ずきんよと、まい日えりこのみに、うき身をやつしておりました。おかげで、サンドリヨンには、新しいやつかいしごとがひとつふえました。なぜというに、きょうだいたちの着物に火のしをかけたり、袖そでぐち口にかざりぬいたりするのは、みんなサンドリヨンのしごとだったからです。ふたりは朝から晩まで、おめかしの話ばかりしていました。「わたしは、イギリスかざりのついた、赤いビロードの着物にしようとおもうのよ。」と、姉はいいました。

「じゃあ、わたしは、いつものスカートにしておくわ。けれど、そのかわり、金の花もよ
うのマントを着るわ。そうして、ダイヤモンドの帯おびをするわ。あれは世間せけんにめったにない
品物なんだから。」

ふたりは、そのじぶん、上手じょうずでひょうばんの美容師びようしをよんで、頭のかざりから足のく
つ先まで、一分ぶのすきもなしに、すっかり、流りゅうこう行こうのしたくをととのえさせました。

サンドリヨンも、やはりそういうことのそうだんに、いちいち使われていました。なに
しろ、このむすめは、もののよしあしのよく分かる子でしたから、ふたりのために、いっ
しょうけんめい、くふうしてやって、おまけに、おけしようまで手つだってやりました。
サンドリヨンに髪かみをあげてもらいながら、ふたりは、

「サンドリヨン、おまえさんも、ぶとう会に行きたいとおもわないかい。」といいまし
た。

「まあ、おねえさまたちは、わたしをからかっていらっしやるのね。わたしのようなもの
が、どうして行かれるのですか。」

「そうだとも、灰だらけ娘のくせに、ぶとう会なんぞに出かけて行ったら、みんなさぞ笑
うだろうよ。」と、ふたりはいいました。

こんなことをいわれて、これがサンドリヨンでなかったら、ふたりの髪をひんまげてもやりたいとおもうところが、このむすめは、それは人のいい子でしたから、あくまでのまれたとおり、りっぱにおけしやうをしあげてやりました。ふたりのきょうだいは、もう、むやみとうれしくて、ふつかのあいだ、ろくろく物もたべないくらいでした。そのうえ、でぶでぶしたからだを、ほっそりしなやかに見せようとおもって、一ダースもレースをからだにまきつけました。そうして、ひまさえあれば、すがたみの前に立っていました。

やがて、待ちに待った、たのしい日になりました。ふたりは庭におりて、出かけるしたくをしていました。サンドリヨンは、そのあとから、じっと見送れるだけ見送っていました。いよいよすがたが見えなくなってしまうと、いきなりそこに泣きふしてしまいました。そのとき、ふと、サンドリヨンの洗せんれいしき札式に立ち合った、名づけ親の教母きょうぼが出て来て、むすめが泣きふしているのを見ると、どうしたのだといって、たずねました。

「わたし、行きたいのです。——行きたいのです。——」こういいかけて、あとは涙で声がつまって、口がきけなくなりました。

このサンドリヨンの教母というのは、やはり妖女ようじょでした。それで、

「あなたは、ぶとう会に行きたいのでしょうか。そうじゃないの。」と聞きました。

「ええ。」と、サンドリオンはさけんで、大きなため息をひとつしました。

「よしよし、いい子だからね、あなたも行かれるように、わたしがしてあげるから。」と、妖女はいました。そうして、サンドリオンの手を引いて、そのへやへつれて行きました。

「裏うらの畠はらへ行って、かぼちやをひとつ、もぎとっておいで。」

サンドリオンは、さっそく行って、なかでもいちばんいいかぼちやをよって、妖女のところへ持つてかえりました。けれども、このかぼちやで、どうして、ぶとう会へ行けるのか、さっぱり考えがつきませんでした。

かぼちやを受けとると、妖女は、そのしんをのこらずくり抜いて、皮だけのこしました。それから妖女ようじよは、手に持ったついで、こつ、こつ、こつと、三どたたくと、かぼちやは、みるみる、金ぬりの、りっぱな馬車にかわりました。

妖女は、それから、台だい所どころのねずみおとしをのぞきに行きました。するとそこに、はつかねずみが六ぴき、まだぴんぴん生きていました。

妖女は、サンドリオンにいつけて、ねずみおとしの戸をすこしあげさせますと、ねずみたちが、うれしがって、ちよろ、ちよろ、かけ出すところを、ついでさわりますと、ね

ずみはすぐと、りっぱな馬にかわつて、ねずみ色の馬車馬が六とう、そこにできました。けれども、まだ御者ぎよしやがありませんでした。

「わたし行つて、見て来ましょう。大ねずみが、まだ一ぴきかかっているかもしれませんから。それを御者にしてやりましょう。」

「それがいいわ。行つてごらん。」と、妖女はいました。

サンドリオンは行つて、ねずみおとしを持って来ましたが、そのなかに、三びき、大ねずみがいました。妖女は三びきのうちで、いちばんひげのりっぱな大ねずみをより出して、ついでさわつて、ふとつた、元氣のいい御者にかえました。それはめつたに見られない、ぴんとした、りっぱな口ひげをはやしていました。それがすむと、妖女ようじよは、サンドリオンにむかつて、

「もういちど、裏うらのお庭へ行つて、じよろのうしろにかくれているとかげを六びき、見つけていらつしやい。」といました。

サンドリオンは、いいつけられたとおり、とかげをとつてかえりますと、妖女はすぐ、それを六人のべつとうにかえてしまいました。それは、金や銀のぬいはくのある、ぴかぴかの制服せいふくを着て、馬車のうしろの台だいにのりました。そうして、そこに、べつたりへばり

ついたなり、押しつくらしていました。そのとき、妖女は、サンドリヨンにいました。

「ほら、これでダンスに行くお供ぞろいができたでしょう。どう、気に入って。」

「ええ、ええ、気に入りましたとも。」と、サンドリヨンは、うれしそうにさげびました。

「けれどわたし、こんなきたないぼろを、着て行かなければならないでしょうか。」

妖女はそこで、ほんのわずか、つえの先で、サンドリヨンのからだにさわったとおもうと、みるみる、つぎはぎだらけの着物は、宝^{ほう}石^{せき}をちりばめた金と銀の着物にかわってしまいました。それがすむと、妖女はサンドリヨンに、それはそれは美しいリスの皮の上^{うわ}ぐつ（ガラスの上ぐつだともいいます。）を、一そくくれました。

こうして、のこらずしたくができあがって、いよいよサンドリヨンが馬車にのろうとしたとき、妖^{よう}女^{じよ}はあらためて、サンドリヨンにむかって、なにはおいても、夜なか十二時すぎまで、ぶとう会にいてはならないと、きびしいわたししました。十二時から一分でもおけると、馬車はまたかぼちやになるし、馬は小ねずみになるし、御^ぎ者^{しや}は大ねずみになるし、べつとうはとかげになるし、着ている着物も、もとのとおりのぼろになるのだから、といつてきかせました。

サンドリヨンは、妖女に、けつして夜なかすぎまで、ぶとう会にはいませんという、か

たいやくそくをしました。そうして、もうはち切れそうなうれしさを、おさえることができないようなふうで、馬車にのりました。

三

さて、王子は、その晩、たれも知らない、どこぞのりっぱな王女が、いましがた馬車にのつて、ぶとう会についたという知らせを聞いて、わざわざ迎えに出て来ました。王子は、王女が馬車からおりると、その手をとつて広間の、みんなおおぜい居る中へ案内して来ました。すると、広間の中はたちまち、しんと静まりかえつて、みんなダンスをやめました。バイオリンの音もしなくなりしました。それは、このめずらしいお客さまの美しさに、たれもかれも氣をとられて、ぼんやりしてしまつたからでした。そのなかで、ただかすかに、こそこそ、ささやく声がして、

「ほう、きれいだなあ。ほう、きれいだなあ。」とばかり、いっていました。

王様も、もうお年はとつておいででしたけれど、そのときは、おもわずサンドリヨンの顔を、じつとながめずにはいられませんでした。そうして、そつとお妃の耳もとにささや

いて、

「こんなきれいな、かわいらしいむすめを見るのは、久しぶりだ。」と、いっておいでになりました。

貴婦人^{きふじん}たちは、貴婦人たちで、みんなじろじろと、サンドリヨンの着物から、頭のかざりものをしらべてみて、まあ、まあ、あれだけのりっぱな^{ざいりよう}材料^{ざいりよう}と、それをこしらえるりっぱな^{しよくにん}職人^{しよくにん}とさえあれば、あしたにもさつそく、この型^{かた}で、じぶんもこしらえさせてみよう、と考えていました。

王子は、サンドリヨンを、そのなかでいちばん名譽^{めいよ}の上^{じょう}席^{せき}へ案内^{あんない}して、それからまた、つれ出して、いっしょにダンスをはじめました。

サンドリヨンは、それはそれは、しとやかにおどったので、みんなは、いよいよびつくりしてしまいました。さて、けっこうなごちそうが、まもなく出ましたが、若い王子は、サンドリヨンの顔ばかりながめていて、ひとつものどにはとおりませんでした。

サンドリヨンはやがて、じぶんのきょうだいたちのいるところへ出かけて行って、そのそばに腰をかけて、王子からもらったオレンジや、レモンを分けてやったりして、それは、いろいろやさしいそぶりをみせました。けれど、ふたりは、それがたれだか分からなかつ

たものですから、ただもうびつくりして、目ばかりくるくるさせていました。サンドリヨン、こうしてきょうだいたちのごきげんをとっているうちに、時計が十二時十五分前を打ちました。するといきなり、サンドリヨンは、ほかのお客たちに、ていねいにあいさつをして、ふいと出て行ってしまうました。

四

さて、うちへかえると、サンドリヨンは、そこに待っていた妖女ようじょにあつて、たくさんお礼をいつたのち、あしたもまた、ぜひぶとう会へやってくださいといつたのみました。それは、王子の熱心ねっしんなおのぞみであつたからです。

こうして、サンドリヨンが、ぶとう会であつたことを、妖女にせつせと話をしていますと、やがて、ふたりのきょうだいがかえつて来て、こつ、こつ、戸をたたきました。サンドリヨンは、かけて行つて、戸をあけてやりました。

「まあ、ずいぶん長く行つていらしたのね。」と、サンドリヨンはさけんで、あくびをして、目をこすつて、のびをしました。それは、うたたねをしていて、たつた今、目がさ

めたというようなふうでした。けれど、じつはふたりが出て行ってから、サンドリヨン^{ひめ}は、まるつきりねたくもねられない気持だったのです。

「おまえさん、ダンスに行ったら、それはたいくつなんぞしなかつたろうよ。なにしろ、あそこへは、まあ、世の中に、こんなきれいな人があるかと思うほど、美しいお姫^{ひめ}さまが来なすつたのだよ。その方が、わたしたちに、いろいろとやさしいことをおっしゃって、ごらん、こんなにレモン^ごだの、オレンジ^ごだのをくださつたのだよ。」と、きょうだい^ごのひとりがいました。

サンドリヨンは、そんなことには、いつこうむとんじやくなようすでした。もつとも、きょうだいたちに、そのお姫さまの名をたずねましたが、ふたりは、それは知らないといいました。そうして、王子様がそのことで、たいそうむちゆうにおなりになって、その名を、とても知リたがつて、みんなにたずねておいでだったという話をしました。そう聞くと、サンドリヨンはにつこりして、

「まあ、その方、どんなにお美しいでしょうね。ねえさまたち、いらしつて、ほんとうによかつたのね。わたし、その方見られないかしら。まあねえ、ジャボットねえさま、あな^ごたのまい日着ていらつしやる、黄いろい着物を、わたしにかしてくださらないこと。」と

いいました。

「まあ、あきれた。」と、ジャボットはさけびました。「わたしの着物を、おまえさんのようなきたならしい、灰のかたまりなんかに、かしてやられるもんか。ひとをばかにしているよ。」

サンドリオンは、いずれそんな返事だろうとおもっていました。それで、そのとおりにことわられたのを、かえってありがたくおもっていました。なぜといって、きょうだいが、じょうだんをいったのを真^まにうけて、着物をかしてくれたら、どんなになさけなくおもったでしょう。

五

さて、そのあくる日も、ふたりのきょうだいは、ぶとう会へ出かけて行きました。サンドリオンもやはり、こんどは、もつとりっぱに着かぎって、出かけて行きました。王子は、しじゅうサンドリオンのそばにつきつきりで、ありったけのおせじや、やさしいことばをかけていました。それがサンドリオンには、うるさいどころではありませんでしたから、

つかうか、妖女ようじょにいましめられていたことも忘れていました。それですから、まだ時計が十一時だと思ったのに、十二も打ったのでびっくりして、ついと立ちあがって、めじかのようにはしっこくかけ出しました。王子もすぐあとを追いかけてましたが、とうとう追いつきませんでした。けれど、サンドリヨンも、あわてたまぎれに、金の上うわぐつを片足落しました。それを王子は大事にしまっておきました。サンドリヨンは、うちにかえりはかえりましたが、すっかり息を切らしてしまいました。もう馬車も、べつとうもなく、また、いつもの古着のぼろにくるまったなり、ただ片足だけはいてかえった、金の上ぐつを持っていました。

さて、サンドリヨンが出て行ったあとで、王様のお城の番小屋へ、おたずねがありました。

「お姫ひめさまが、ひとり、門を出て行くところを見なかったか。」

ところが、番兵の返事は、

「はい、見たのはただひとり、ひどくみすばらしいなりをした若いむすめでした。それは貴婦人きふじんどころか、ただのいなかむすめとしか、おもわれないふうをしていました。」というのでした。

さて、ふたりのきょうだい、ぶとう会からかえつてくると、サンドリヨン、こういつて聞きました。

「たんとおもしろいことがありましたか。きれいなお姫さまは、きょうも来ましたか。」
ふたりがいうには、

「ああ、けれども、その人ったら、十二時を打つといっしょに、あわてて逃げだしたよ。あんまりあわてたものだから、金の上ぐつを、片足落して行つたのさ。その上ぐつの、かわいらしいことといつてはないものだから、王子は、それをしまっておきなされた。王子はぶとう会でも、しじゅうお姫^{ひめ}さまのほうばかり見ていらした。きつと、王子は、金の上ぐつをはいているきれいなひとを、すいていらつしやるにちがいないよ。」

六

なるほど、ふたりのいったとおり、ちがいはありませんでした。それから二三日すると、王子はラツパを吹いておふれをまわして、その金の上ぐつの、しっくり足にはまるむすめをさがして、お妃にするといわせました。そうして、王子は、家来^{けらい}たちに、その金の上ぐ

つを持たせて、王女たちから貴族のお姫さまたち、それから御殿じゅう、のこらずの足をためさせてみましたが、みんなだめでした。

さて、とうとうまわりまわって、金の上ぐつは、いじのわるい、ふたりのきょうだいたちのところにまわって来ましたから、ふたりとも赤くなつて、むりに足をつっこもうとしましたが、どうして、どうして、それはみんな、気のどくな、むだな骨おりでした。

サンドリヨンとは、そのとき、わきで見えていますと、それはなんのこと、じぶんの半分おとしてきた上ぐつでしたから、ついわらい出してしまつて、

「かしてくださらない。わたしの足にだつてあうかもしれないから。」といいました。

すると、ふたりのきょうだいは、ぷつと吹き出して、サンドリヨンをからかったり、あざけつたり、いじわるく追いだそうとかかりました。けれど、金の上ぐつを持ったお役人は、じつとサンドリヨンの顔を見て、これはめずらしく美しいむすめだとおもいましたから、たとえ、たれでも、ためすだけは、ためしてみなければならぬ、それが王子様のおいいつけだといいました。

そこで、サンドリヨンに腰をかけさせて、上ぐつを、その足にはかせますと、それはするりと、ぐあいよくはいつて、まるでろうでかためたように、ぴったりにくつついてしま

ました。ふたりのきょうだいは、そのとき、どんなにびっくりしたでしょう。どうして、それどころか、サンドリオンは、かくしの中から、もう片かたの上ぐつを出して見せました。ちょうどそのとき、サンドリオンの教母きょうぼの妖女ようじょがすぐあらわれて、杖で、サンドリオンの着物にさわりますと、こんどは、まえよりもまた、いっそう美しい、りっぱな着物にかわりました。

それで、ふたりのきょうだいには、あのぶとう会で見た美しいお姫ひめさまが、サンドリオンであったことが分かりました。ふたりは、サンドリオンの足もとにつつぶして、これまでひどい目にあわせた罪つみをわびました。サンドリオンは、ふたりの手をとっておこして、やさしくだきしめました。そして、これまでふたりのしたことは、なんともおもわない。そのかわり、これからは、やさしくしてくれるようにといいました。

サンドリオンは、りっぱな着物を着たまま、王子の前へつれて行かれました。王子は、それで、いよいよサンドリオンがすきになって、それから四、五日して、めでたくご婚こんれ礼しきの式をあげました。

サンドリオンは、顔が美しいように、心のやさしいむすめでしたから、ふたりのきょうだいをも、お城へ引きとってやって、ご婚礼のその日に、やはり、ふたりの貴族きぞくにめあわ

せることにしました。

顔とすがたの美しいことは、男にも女にも、とうといたからです。でも、やさしく、し
おらしい心こそ、妖女のこの上ないおくりものだということを知らなくてはなりません。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

1950（昭和25）年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本は、表題の「灰かぶり姫」に「サンドリヨン」とルビをふっています。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

灰だらけ姫

またの名「ガラスの上ぐつ」

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ペロー Perrault

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>